

記念講演②

「学童保育の役割と未来 ー歴史から考えるー」

石原 剛志さん（静岡大学）

1. はじめに

- (1) 連載「学童保育を求め、つくってきた人々 学童保育の歴史から学ぶ」（『日本の学童ほいく』2017年10月号～2018年3月号）の執筆をふりかえって
- (2) 歴史というと暗記モノ、偉人やカリスマ、天才が主人公となる歴史像と違い、特に高度経済成長期からの学童保育の歴史は、保護者と指導員がつくってきた歴史。

2. 悲しみからの出発——敗戦直後、学童保育をはじめた女性・三木達子

- (1) 夫を亡くした後の決意「正しい事のため、弱いもののため、可憐な子ども達のために進む」
- (2) 自ら園長をつとめる保育園だけでなく、「口を開けば学童保育を叫びつづけ」、保護者が立ちあがりつくる学童保育の時代へとバトンをつないだ。

3. 働き続ける決意と共同が切り拓く——高度経済成長期、働きつづけることをあきらめず、手を取り合っで学童保育をつくった保護者

- (1) 1950年代 母親として外で働きつづけることの難しさ
- (2) 1960年代 保護者が共同してつくる共同保育所づくり運動の経験とその後の運動
- (3) 保育所づくり以上に経験のない新しい子育てのあり方、その生みの苦しみ

4. 願いと経験をつなぐ学童保育研究集会

- (1) 1968年11月23～24日、第3回学童保育研究集会が全国の関係者によびかけ開催された。120人ほどの参加 → 願いと経験の交流は、今では数千人規模の集会へ。
- (2) 各地でも学童保育研究集会の開催へ

5. 手さぐりで歩む——1970年代、新しい仕事の内容と価値を手さぐりつづけた学童保育指導員

- (1) 手本にできる本も理論もないなかでの困難
- (2) 実践を綴ることの意義
- (3) 仲間とともに、手さぐりで、仕事をつくるということ

6. 学童保育の今から未来へ

- (1) 歴史的成果としての専門職としての学童保育指導員像--連協・組合がつくってきた研修や「基準」としての「放課後児童支援員」。
- (2) 商品としての「学童保育」サービス市場が広がるなかで--問われる保護者間／保護者・職員の共同（協同・協働）
- (3) 子どもの権利としての学童保育の保障を 学童保育を利用する権利と、学童保育としての「遊び及び生活の場」の質を子どもの権利としてふさわしいものに。
- (4) 「放課後」を習い事、塾、スポーツ教室で、何かしら将来に役に立つ「能力」を身につけるための時間とする捉え方の拡がり、子どもが子どもとして今を生きて楽しむことを保障する課題（子どもの権利としての休息・余暇、遊び、文化的・芸術的生活への参加）。